

実践報告

グローバル人材育成としての日本語教師養成 その実践と成果

深澤のぞみ・太田 亨・峯 正志^{※1}

要 旨

昨今では、社会のさまざまな面でグローバル化が重視されるようになった。金沢大学国際学類の日本・日本語教育コースでは、国際機構留学生センターと連携して、グローバル人材としての日本語教師養成を行っている。本稿では、その実践と成果について報告する。

I はじめに

グローバル化の影響が社会のあらゆる面で言われるようになって久しいが、金沢大学でも、グローバル人材の育成に力を入れて教育を行っている。金沢大学における日本語教師養成は、2008年に3学域16学類への改組¹が行われる前の教育学部時代から続いてきているが²（深澤他2013）^{※2}、人間社会学域国際学類では、この日本語教師養成を引き継ぎ、国際機構留学生センターと連携しながら、グローバル化社会により適合した形で、かつ、大学の国際化戦略に拠って日本語教師の養成を行っている。本稿では、現在金沢大学において展開されている日本語教師養成の実際を、現カリキュラムの概要を報告した上で、日本語教育実習、海外日本語教育実習、医学部補講という実践を特に取り上げ、その内容と成果について報告していきたい。

（文責：深澤）

II 金沢大学における日本語教師養成の取り組み

1 国際学類日本・日本語教育コース

現在、金沢大学では、人間社会学域国際学類の中の日本・日本語教育コースにおいて日本語教師養成が行われており、「異文化とのしなやかな共生」を目指す国際学類の

中で、専門職としての日本語教師養成とともに、グローバル人材としての日本語教師養成を意識した教育が行われている。この日本・日本語教育コースでは、グローバル化する現代社会における質の高い日本語教師の需要に適合したカリキュラムの提供が大きい目的であり、国際学類ホームページにも、日本の文化・社会・歴史や日本語・日本語教育に対する深い理解と知識を持ち、同時に英語を中心とした外国語コミュニケーション能力を備えた国際人を養成するための、幅広いカリキュラムを用意するとある^{注3}。

大きい特徴としては、グローバル化する現代社会をマクロな視点から理解することと、英語やその他の言語での外国語コミュニケーション能力を身につけることを、日本語教師養成の重要な基盤と位置づけられていることが挙げられる。そのために、国際学類内はもとより、留学生センターや海外日本語教育実習先の中国北京師範大学などとの緊密な連携をはかりながら、教育が行われている。以下では、その詳細を述べて行くこととする。

2 カリキュラムと専門科目

日本語教師養成プログラムという点、となく日本語や日本語教授法のみが焦点が当てられがちであるが、本コースは、国際学類の中の一コースであることを強みとし、その上で上述した日本語教師養成に求められる教育内容に適合するような日本の文化や社会、歴史、そして日本語と日本語教育に関する知識を積み上げていくカリキュラムになっている。

表1は、本コースで単位取得後に付与されることになっている「日本語教育主専攻相当資格」の科目表である^{注4}。

表1 日本語主専攻資格取得のための科目表

単位取得のために開設される授業科目			備考（必修・選択必修の別、科目区分、どの科目区分から何単位修得が必要かなど）	
科目名	開講学期	単位数		
現代日本の文化と社会	2年	2	選択必修	「社会・文化・地域」 15科目中より 10単位以上
日本人の思想と文化	2年	2	選択必修	
国際学入門	1年	2	必修	
国際関係論	2年	4	選択必修	
国際協力論	2年	2	選択必修	
日本文化	1年	2	必修	
日本史概説	2年	2	選択必修	
日本経済論	2年	2	選択必修	
日本の伝統芸能 ※隔年開講	2年	2	選択必修	
日本政治・外交史	2年	2	選択必修	
日本の文学	2年	2	選択必修	

日本の近代文学 ※隔年開講	2年	2	選択必修	「社会・文化・地域」 15科目中より 10単位以上
日本の現代文学 ※隔年開講	2年	2	選択必修	
日本文化体験 A	2年	2	選択必修	
日本文化体験 B	2年	2	選択必修	
社会言語学	3～4年	2	必修	「言語と社会」 10科目中より 8単位
社会言語学実習	3～4年	1	選択必修	
国際コミュニケーション論	2年	2	選択必修	
現代中国論 A	2～4年	2	選択必修	
現代中国論 B	2～4年	2	選択必修	
東アジア国際交流史	2～4年	2	選択必修	
米英言語思想論	2～3年	2	選択必修	
英語圏文化論	3～4年	2	選択必修	
現代ヨーロッパ社会論	2～4年	2	選択必修	
ヨーロッパ社会言語学	2～4年	2	選択必修	
異文化理解	1年	2	選択必修	「言語と心理」 3科目中より 4単位以上
第二言語習得論	3～4年	2	選択必修	
発達と学習の心理	2～4年	2	選択必修	
日本語教育学基礎	2年	2	必修	「言語と教育」 9科目中より 14単位
日本語教科書研究	2～4年	2	必修	
日本語教授法 A	2～4年	2	必修	
日本語教授法 B	3～4年	2	必修	
日本語教育とコンピュータ	3～4年	2	選択必修	
日本語教育評価法	3～4年	2	選択必修	
日本語教育実習 A	3～4年	1	必修	
日本語教育実習 B	4年	1	必修	
日本語教育史	3～4年	2	選択必修	
日本語学概論 A	2年	2	必修	「言語」 13科目中 14単位
日本語学概論 B	2年	2	必修	
日本語の文字・表記	2～4年	2	選択必修	
日本語の語彙・意味	2～4年	2	選択必修	
日本語史 A	2～4年	2	選択必修	
日本語史 B	2～4年	2	選択必修	
日本語文法 A	2～4年	2	必修	
日本語文法 B	3～4年	2	選択必修	
音声学	2～4年	2	必修	
言語学概論 1	2～4年	2	選択必修	
言語学概論 2	2～4年	2	選択必修	
対照言語学	3～4年	2	選択必修	
認知言語学	3～4年	2	選択必修	

本コースの科目では、日本語教育に関する専門的な知識を深めるとともに、実践的なスキルを育成することにも重点がおかれている。「日本語教授法 A, B」では日本語教授法に関する基礎知識が教授項目であるが、さらに模擬授業を行い、知識をしっかりと

り身につける。そして、「日本語教授法 A, B」の履修の後、「日本語教育実習 A, B」を履修する計画となっている。またその他、希望によっては、日本語学校や国際交流機関でのインターンシップも経験できる。本稿ではまず、「日本語教育実習 A」について、詳細を述べる。

(文責：深澤)

Ⅲ 日本語教育実習 A

1 「日本語教育実習 A」沿革とカリキュラム上の位置づけ

「日本語教育実習 A」は、人間社会学域国際学類 日本・日本語教育コース選択指定科目（3年後期）として平成22（2010）年より始まった。だが、それ以前の平成15（2003）年から平成22（2010）年まで、教育学部人間環境課程日本語・日本文化教育コース 専門科目（4年前期）の「日本語教育実習」として、8年間の実績があった。「日本語教育実習 A」となってからは、教育学部時代に初級と中級前半レベルの実習を一緒に行っていたものを分離し、中級全般レベルのみに特化した授業へと発展・改良した。

「国際学類日本・日本語教育コース」のホームページ中にある「教育内容」項目によると、「本コースは、平成12年に本学教育学部人間環境課程に開設された日本語・日本文化教育コースを発展的に受け継ぐもので、1年次は共通教育科目を中心に学域共通科目と学類共通科目を、2年次では学類共通科目を中心に日本語学・日本語教育の基礎的科目を履修し、人間社会学域および国際学類の基礎的な素養を身に付けます。3・4年次には、日本語教師養成（主専攻レベル）に必要とされる内容を軸とした科目を深くかつ集中的に学びます。また、「日本語教授法」「日本語教育実習」等の演習・実習科目を2年次から4年次にかけて用意し、並行して留学生センターの日本語授業のティーチングアシスタント等を通して現場を体験します。」（<http://sis.w3.kanazawa-u.ac.jp/course/japanese.html>, 2012.12.18参照）とあり、国際学類のカリキュラム体系において、初級クラスの実習演習を行う「日本語教授法 B」（3年前期）と、留学生配偶者支援のための日本語クラス運営を行う「日本語教育実習 B」（4年前期）との中間に位置し、両者を橋渡しする役割を果たしている。

2 「日本語教育実習 A」授業目的・目標

「金沢大学 Syllabus2012」（<http://sab.adm.kanazawa-u.ac.jp>）によれば、「日本語教育実習 A」の授業目標は、「日本語教授法 A」から「日本語教授法 B」を通して学んできた内容を土台として、中級レベルの日本語授業見学や教案作成と実習を行うことで日本語教育を実践的に学ぶ。さらに、本実習で学んだことを次の「日本語教育実習 B」

へとつなげること」である、という。

3 「日本語教育実習 A」 シラバス

授業シラバスは、前項で触れた「金沢大学 Syllabus2012」に簡易版のものを掲載しているが、同時に詳細シラバスを学生に配付している。一例として、平成24 (2012) 年度の授業で使用したものを以下に示す。

表2 平成24年度「日本語教育実習 A」 詳細シラバス

回	日付	授業トピック	授 業 活 動 内 容
1	10/03	オリエンテーション, Acanthus Portal 使用法教案とレポートについて,	本授業の進め方や注意事項について説明, Acanthus Portal を利用した授業の進め方 Excel での教案・レポートの書き方
2	10/10	「授業の流れ」と中級の授業, 授業ビデオ視聴のポイント	授業の流れと中級の授業について確認, 授業視聴の指導・学習項目確認と授業展開イメージトレーニング, (1 週間内に C ₂ 授業ビデオ視聴&レポート)
3	10/17	C ₂ 実習準備	C ₂ 実習の指導・学習項目確認『文化中級日本語 I』
4	10/24	C ₂ 授業実習 1	実習生 1 担当: 1 課 導入, 本文 1-1 実習生 2 担当: 1 課 本文 1-2 実習生 3 担当: 1 課 聴解
5	11/7	C ₂ 授業実習 2	実習生 4 担当: 2 課 導入, 本文 2-1, 練習 a, 実習生 5 担当: 2 課 本文 2-2, 練習 b
6	11/14	C ₂ 授業実習 3	実習生 6 担当: 2 課 本文 2-3, 文型 4-5 実習生 7 担当: 2 課 練習 c, 聴解
7	11/21	C ₂ 授業実習 4	実習生 8 担当: 4 課 本文 4-1 実習生 9 担当: 4 課 本文 4-2 実習生 10 担当: 4 課 表現・語句 11 「性格や行動の傾向を表す言葉」, 聴解
8	11/28	C ₂ 実習フィードバック, D 授業見学	C ₂ 実習後のフィードバックなど 授業見学の指導・学習項目確認と授業展開イメージトレーニング, (この 1 週間のうちに D 授業見学&見学レポート)
9	12/05	D 実習準備	D 実習の指導・学習項目確認『上級へのとびら』
10	12/12	D 授業実習 1	実習生 1 担当: 9 課・読み物「日本の教育の現状」(1~37行目), 内容質問 1~6 実習生 2 担当: 9 課・読み物「日本の教育の現状」(38~69行目), 内容質問 7~10
11	12/19	D 授業実習 2	実習生 3 担当: 9 課・会話文 1~2, 会話練習 1, (ロールプレイ 2), 実習生 4 担当: 9 課・会話文 3~4, 会話練習 2, (ロールプレイ 1)
12	01/09	D 授業実習 3	実習生 5 担当: 9 課・文化ノート 5 「日本人のジェスチャー」, 発展会話 実習生 6 担当: 6 課・(本文を読む前に 1), 読み物 1 「日本人の生活と宗教」, 内容質問・読み物 1

13	01/16	D 授業実習 4	実習生 7 担当：6 課・(本文を読む前に 2)，読み物 2「天の岩戸」，内容質問・読み物 2 実習生 8 担当：6 課・会話文 1～3
14	01/23	D 授業実習 5	実習生 9 担当：6 課・発表，発表の後で 実習生 10 担当：6 課・本文を読む前に 3，文化ノート 2「日本の色々な迷信」
15	01/30	「日本語教育実習」授業評価	「日本語教育実習」授業全体に対する評価作業

授業ビデオ視聴：2012年10月中旬 C₂ 「文化中級日本語Ⅰ」(中級前半)

授業見学：2012年11月最終週 D 「上級へのとびら」(中級後半)

注意事項：

①留学生センターの総合日本語プログラムの授業見学日は、日本語教育実習の開講時限(毎水曜 4 時限目)とは異なるため、参加できない場合はすぐに届け出ること。

②授業実習は一人当たり 2～25 分 (C₂) 程度、25～30 分 (D) 程度を予定している。

4 「日本語教育実習 A」授業の実施内容と進め方

授業は、「Excel を使ったレポートと教案の書き方・操作方法」，「学習管理システム Acanthus Portal を使った資料配付とレポート提出方法」，「中級レベルの授業内容の検討」，「中級前半レベルの授業ビデオ視聴とレポート」，「中級前半レベルの教案作成・教育実習・実習授業見学レポート」，「中級後半レベルの授業見学とレポート」，「中級後半レベルの教案作成・教育実習・実習授業見学レポート」，「日本語教育実習 A 全体の授業評価」で構成される。

授業の中心をなす教育実習では、学生が Excel を使って教案を書いて教員にメール添付書類として送り、教員が Excel のコメント機能を使って添削・コメントして送り返す。そして、「最終稿」と認められるまで修正と添削を繰り返す。学生は、「最終稿」と認められた教案を学習管理システム Acanthus Portal の指定箇所にアップロードし、その後実習のための教材と教具の準備を整えて本番に臨む。

実習には、留学生センターの総合日本語プログラム C₂(中級前半) と D (中級後半) を受講している留学生の中からボランティア 5 名程度を募り、実習のためのクラスを編成する^{注5)}。

実習当日、教員は実習の様子をメモしながら授業を録画し、授業後に録画映像を数回見直した上 100 点満点で採点する^{注6)}。

このような実習を中級前期レベルのものと中級後期レベルのものの 2 回行う。実習を担当しない回の学生は実習担当者の様子を観察しレポートにまとめていく。

以上、15～16 回で 1 学期間の授業は構成されている。

5 「日本語教育実習 A」における評価方法

「日本語教育実習 A」全体の成績評価は、授業見学レポート (10%)、模擬授業見学レポート (20%)、教案作成及び実習評価 (25%×2=50%)、出席 (10%)、授業参加度合い (10%) の5つの観点から総合的に判断し、最終的には大学の標準評価方法である、「S (達成度90~100%)」、「A (同80~90%未満)」、「B (同70~80%未満)」、「C (同60~70%未満)」、「D (同60%未満)」により、S~Cを合格としている。

2回行う実習の評価は、それぞれ「教案の作成・過程」(20点)、「教材・教具・説明内容」の「適切さ」(10点)、さらに「使用・技術」(20点)、「授業運営」の「運営・流れ」(30点)、同「対学習者」(20点)の計100点満点で、教員が主観評価を行う。

さらに、レポートについては、「授業ビデオ視聴」と「授業見学」については、「指導項目」の記述 (20点)、「授業の流れ」の記述 (60点)、「注目するポイント」での授業コメント (15点)、「学習者の様子」の記述 (5点)の計100点満点で、教員が主観評価する。一方、実習授業を見学して簡易レポートとして提出したものについては、「A」(大変よくまとめている)、「B」(必要十分な記述がある)、「C」(レポートに何らかの不備がある)、「D」(提出期限遅れ)の4段階で評価し、さらにA~B段階は必要に応じて「+」と「-」の下位ランクをつけることがある。

6 「日本語教育実習 A」の果たす役割

この節の最後として、本授業の果たす役割をまとめてみると、次の4点が挙げられる。

- ① 中級レベルの留学生を相手に、中級レベル全般の実習クラス授業を実際に行う。
- ② 初級模擬授業演習の「日本語教授法 B」を引き継ぎ、留学生配偶者対象の日本語クラス運営を行う「日本語教育実習 B」へとつなげる。
- ③ 授業見学と見学レポート及び教案書きを通じて、観察力と客観的な記述力、及び企画力を向上させる。
- ④ 教案及びレポート書きを通して Excel の様々な操作と活用法に慣れさせる。

①は本授業の主目的であり、授業の中核をなす部分である。②は国際学類日本・日本語教育コースのカリキュラム上の位置づけを表す。そして、③と④は受講する学生の修得スキルに関する目標と言える。

これらの目的・目標を達成するため、これからも時代の要請に合わせ「日本語教育実習 A」は内容をさらに調整し、改善・改良を図っていくつもりである。

(文責：太田)

IV 日本語教育実習 B（留学生配偶者への日本語支援活動）

1 「日本語教育実習 B」の目的

3 年次後期の日本語教育実習 A に続き、4 年次前期に、日本語教育実習 B が開講される。この科目を受講できるのは、日本語教授法 A、B の両方を履修し、日本語教育実習 A も履修済みの学生だけである。この日本語教育実習 B は、国際学類が設置されて初めて開設された科目である。

日本語教育実習 B で目指すのは、学生が日本語教育実習 A で中級レベルの日本語授業見学や教案作成と実習を経験した後、実際の日本語教育の場で活動できるような実践的なスキルを身につけることである。具体的には、日本語学習者のニーズ分析に基づいたコース全体のデザインを行い、その目的や参加者のニーズに適合したカリキュラムを計画した上で、実際のコースの運営と授業の担当、さらに授業評価やコース評価も行うことを目標とする。ここに至る前の日本語教授法や日本語教育実習 A では、日本語クラスの一部の内容を計画し実践することを経験したのに対し、日本語教育実習 B では、学生が協力して、小規模で限られた期間ながらも、実際の日本語教室の運営をするのが特徴である^{注7}。

日本語教育実習 B では、原則として、学生がコースデザインやシラバスデザイン、コース運営と授業の実施など、すべてを協力しながら担当するが、この教育実習のコースを受講する日本語学習者についてだけは、あらかじめ、原則として「留学生の配偶者」と限定することにした。金沢大学の留学生センターでは、様々なニーズに適合した日本語の授業を豊富に提供しているが、すべて金沢大学に籍を置く留学生が対象であり、留学生の配偶者に対して提供される授業はなかった。しかし留学生の配偶者も日本社会に適応していくために、日本語授業を受講したいという希望がこれまでもあった。留学生センターの日本語授業については、定員に余裕がなく、配偶者のためのコースを新たに開講する予算措置を行うのも困難であるため、日本語教育実習 B として、留学生配偶者を対象とした日本語導入コースを開講することにし、留学生配偶者を大学の外で開講されている日本語教室^{注8}へつなぐ役割を果たすとともに、実習を行う学生にとっても、日本語を学ぶ日本語学習者と直に触れ合い、実際のコースを企画運営する機会を提供するものである。

2 「日本語教育実習 B」の実施内容

日本語教育実習 B は、2011年に初めて開講され、その後、2012年に2度目の開講がされた。まず、4月から5月にかけて、留学生配偶者の受講生を募り^{注9}、ニーズ調査を

経て、コースデザインを行った上で、8 回程度の日本語授業から成るコースを企画運営するという流れになる。コース終了後、コースの見直しを行い、まとめレポートを書いて、実習の終了となる。

2012年の日本語教育実習 B のスケジュールは、表 3 のようであった。

表 3 平成24 (2012) 年度「日本語教育実習 B」スケジュール

回	月 日 (月曜・4 限)	内 容
1	4 月 9 日	オリエンテーション、今後の作業内容の決定
2, 3	4 月16日, 23日	コース開設準備①②
4	5 月 7 日	参加者向けオリエンテーション実施
5, 6	5 月14日, 21日	コース開設準備④⑤
7~13	5 月28日, 6 月 4 日, 11日, 18日, 25日, 7 月 2 日, 9日	留学生配偶者向けサバイバル日本語コース 1 回~ 7 回
14~16	7 月17日(火), 23日, 30日	振り返り、フィードバックなど

平成23 (2011) 年度のコースの履修者 (教育実習生) 数は11人で、平成24 (2012) 年は 8 人であった。そして、この留学生配偶者のためのコースに参加した日本語学習者は、平成23 (2011) 年は 8 人、平成24年は数回のみの参加の学習者などもあったが、6 人であった。

2011年と2012年のコース内容は少し異なるが、どちらのコースにおいても、参加予定の日本語学習者に対してオリエンテーションを行い、教育実習生と参加予定の日本語学習者との顔合わせと日本語に関してどのようなことを学びたいか、どのようなことに困っているかのニーズ調査を実施した。教育実習生の話し合いの結果、生活に密着したテーマで、簡単な会話表現と、地域の情報などを得られるような内容の授業を行うことに決まった。具体的には、買い物に関するテーマや、金沢でのバスの乗り方、病気と病院についてのテーマ、学習者の国を紹介してもらうなどのテーマが選ばれた。必要な語彙や表現、そしてそれを使った会話練習のほかに、学習者にも積極的に話してもらう活動や、日本語力のレベル差があってもできるような教室活動などが工夫された。

毎回の授業は 2 人の教育実習生が行い、他の教育実習生はチューターとして活動に参加し、日本語学習者のサポートや、授業のサポートなどを行った。

3 「日本語教育実習 B」の実施評価

まず、コースを受講した日本語学習者からの評価としては、授業ごとにチューター

が内容や学習者のレベルに適合しているかどうかなどを聞いて、次の授業への参考とした。その結果、概ね、学習者の評価はよく、身近なテーマの授業を、チューターのサポートを受けながらゆっくり学べるということを述べた日本語学習者が多かった^{注10}。

教育実習生には最終レポートを提出させているが³、ほとんどの学生が³、コースそのものを企画運営することの大変さと、うまく運んだときの充実感を挙げている。教育実習のコースであっても、日本語コースを開講するということは、社会的な責任が生じていることだということに気づいた学生もいる。また、日本語教授法のコースで学んだ典型的な文型積み上げ形式の日本語授業や、日本語教育実習 A で経験した教科書を用いた中級レベルの日本語授業とは違い、地域交流型に近いタイプのコースを企画して運営実施したことの困難さと充実にも触れられている。日本語教育が極めて多様化している昨今では、教育実習で日本語授業の様々なタイプを経験させることは大きい意味を持つと思われる。

課題として残っているのは、教育実習 B の開講時期についてである。この授業は、4 年次の前期に開講されるが³、一般就職を目指す学生にとっては、就職活動の只中の時期に重なってしまう。また、さらには、教職免許取得を目指す学生は、この時期に学校教育実習を行う場合もある。この授業は、教育実習であるから、授業自体に出席し、それぞれの学生が主体的な役割を果たさなければならないことは言うまでもない。しかし、就活や学校教育実習のために、欠席が多くなってしまう学生が少なくないのは、やむを得ない事情とは言え、大きい問題である。学生たちは、あらかじめ、それぞれの都合を考慮しながら、準備と授業担当の日の調整を行っていたが³、それでも問題がなかったわけではない。日本語教育実習 B は、仕上げの役割をする科目でもあるため、開講時期は、やはり 4 年前期しか考えられないが³、日本語コース開講の時期については、学生の予定を考慮しながら工夫するなど、あらかじめ、十分検討する必要があると思われる。

(文責：深澤)

V 海外日本語教育実習

日本語教育実習 A と B の双方を履修した学生のうち、希望する学生については、4 年次の夏季休暇中に中国の北京師範大学外国語文学学院日本語系にて、日本語教育実習を行っている。北京師範大学は金沢大学の協定大学であり、かつ大学院レベルでも二重学位プログラムを共に行っている大学で、従来から交流を継続している大学で

ある。

北京師範大学での教育実習は、これまで平成24（2011）年度に初めて実施され、その後平成25（2012）年度にも引き続き実施された。詳細を表4に示す。

表4 北京師範大学での教育実習の概要

年度	期 間	参加人数	内 容
2011	9月11日(日)～24日(土)	1人	総合日本語（1年生）、会話（2年生）など
2012	9月9日(日)～23日(日)	2人	総合日本語（1年生、2年生）、会話（2年生）など

実習期間は2週間で、1週目は授業の見学、そして2週目から実習生が授業担当をするという内容であった。授業担当の際には、北京師範大学の担当教員が事前に教案チェック、授業後にフィードバックと、たいへん丁寧な指導をしていただくことができた。また、1週目の週末には、学生の希望により、観光も行った。

本教育実習の単位認定は、国際学類設置後に初めて開講された授業でもあり、希望者や実施内容の予想がつきにくかったこともあり、2011年度および2012年度には、「異文化体験実習A」の単位が付与された。しかし、実施が軌道に乗り、内容も教育実習として十分満たされていると判断され、2013年度からは専用の単位として「海外日本語教育実習」として2単位が付与されることになった。

参加学生からの感想としては、初めて海外での教壇に立って授業を行ったことは、非常に努力を要することであったが、北京師範大学の学生たちの日本語学習への熱心さに助けられ、充実した実習を行えたというものであった。また、北京師範大学の授業担当教員から金沢大の教員とは違う観点からの丁寧な指導が受けられ、ためになったという感想もあった。国内での日本語教育と海外での外国語としての日本語教育では、目的も教授法も、日本語教師の役割も異なる。そのことを直に実感できたのではないかと考えている。

2012年度の実習は、中国国内での反日デモが最も激しかった時期と重なり、教育実習の実施自体をどうすべきかを検討せざるを得なかった。北京師範大学の担当教員や国際学類内の中国に詳しい専門家と協議し、反日デモが起こっている背景を理解させた上で、中国国内での行動を慎重に行えば大丈夫であろうとの結論に至り、実施することになった。北京師範大学内では、特に反日の動きはなく、また同時に北京師範大学の関係者からは、実習中、様々な配慮をいただいたため、問題なく教育実習が終了できたことについては、安堵するものであった。このことは、苦しい経験ではあったが、受講学生はもちろんのこと、関係者にとっても、日本と世界の関係について熟慮

する機会となった。

直接、教育実習と関係する事項ではないが、教育実習中、北京師範大学の大学院生がTAとして空港への出迎えや、大学内外の案内や支援をしてくれた。この大学院生は、教育実習終了後10月から、金沢大学に二重学位取得プログラムの大学院生として留学予定の学生であったため、逆に留学生の金沢来日の際には、日本語教育実習に参加した国際学類生が、ずっとサポートをした。よく知り合っている学生同士で、交流が深まった。副次的ではあるが、協定校同士の交流の多様化や深化に貢献できたのではないかと感じている。

(文責：深澤)

VI 学内インターンシップとしての医学部補講 TA

この章では、金沢大学での日本語教師養成の一つの興味深い試みとして、留学生センターの日本語プログラム「総合日本語プログラム」の医学部補講における学内インターンシップとも言える試みについて紹介する。

日本語教師養成には、実際に学んだ知識を実践する場が不可欠である。金沢大学では通常の教育実習の他、希望者には県内の日本語教育機関でのインターンシップや海外教育実習の機会も提供するなどし、実践的な活動を重視しているが、実際に日本語教師として採用されるには日本語教育の現場での経験が求められるため、これら以外にも可能な限り日本語教師としての経験に結びつくような機会を作るようにしている。そのような試みの一つがここで紹介する「医学部補講」での日本語授業実地研修と授業補助なのである。

以下、まず創設の経緯を述べ、実際の学生による授業運営の様子・教員の指導体制について述べ、最後にこの試みについての国際学類および留学生センターからの評価を述べる。

金沢大学で行われている唯一の日本語プログラム、「総合日本語プログラム（以下総合プログラムと呼ぶ）」は、現在、角間キャンパスと宝町キャンパスの二つのキャンパスで授業を行っているが、医学部補講を行っている宝町キャンパスでの授業は、平成18年度春学期から新しく始まったものである。平成17年度の春学期終了後、工学部が角間キャンパスに移転したことに伴い、総合プログラムは一旦角間キャンパスのみでの開講となった。しかし、角間キャンパスでの受講が難しい医学部の学生から、宝町キャンパスで是非日本語の授業を行って欲しいという強い要望を受けたため、留学生センターの予算から謝金を出し、週2回だけの日本語クラスを始めることにした。こ

れが現在の医学部補講である。

医学部にも様々なレベルの学習者がいるにもかかわらず、1レベルしか設ける余裕がなかったため、当初は複式授業形式で行っていたが、これは当然ながら学習者にも授業担当者にも不評であった。そこで、改組が行われる以前の教育学部日本語教育専攻学生に手伝いを依頼し、主に文法項目導入後の会話練習の相手などをしてもらうことにした。そのうち、将来は日本語の教師になろうという強い意志を持ち、積極的に留学生の教育に関わってみたいという意欲の高い学生が現れるようになったため、彼らの教育実践の場としてうまく授業の中に組み込めないだろうか考えるようになった。そのようにすることで、日本語専攻の学生は貴重な日本語指導の練習をする機会を持つことが出来る。また、留学生センターの方も、教える人間が増えることにより複式授業を解消でき、更にレベルを増やすことも出来る可能性が出てくる。このように双方にとって利点があることなので、問題はあるとしても進めていこうということになった。

この試みを始めるうえで好都合だった点として、医学部補講がいくつかの点で他の総合プログラムの授業とは異なる性格を持つものであったことが挙げられる。角間キャンパスで行われる授業は、登録期間中に正式に登録した学生だけが受講できる上、定期試験もあり、学期末には総合成績に基づき合格・不合格が決定される。さらに、その成績に基づいて次の受講クラスが決定される。これに対して医学部補講は、登録期間を設けず学生を随時受け入れている。また、評価は出席のみで、定期テストも行わない。つまり、医学部所属の学生に日本語の授業を受ける機会を与えるということを中心としたクラスなのである。試験で合格・不合格を決めるような厳格な他のクラスと異なり、医学部補講は研修としての日本人学生の授業担当を受け入れやすい素地があったと言える。

では、実際にどのような形で運営されているのであろうか。まず担当するのは、日本語教育専攻で教授法や教育実習をすでに終えた大学院生または4年生である¹¹⁾。これらの学生が国際学類教員や留学生センター教員の監督の下、授業を週1度担当するのである。教材および授業構成についての指示を受けた後、学生が教案を作成し、教員のチェックを受けた上で授業に臨む。これらの授業に、日本語教育専攻の2、3年生が更に授業補助として教材準備、会話練習の相手などを務めることもある。これらの授業は、同じ時限に行われる国際学類または留学生センターの専任教員による授業と同じ教室で行われる（パーティションで仕切られている）ため、専任教員が様子を把握することが出来る。授業後は、専任教員と彼らのミーティングが行われる。ここでは教員からフィードバックが与えられるだけでなく、彼らの専任教員の授業に対する

感想なども話し合われる。このような形で、現在まで休むことなくこの試みは続けられている。

このインターンシップとも呼べる授業の実地研修には毎年3～4名の希望者がおり、熱心に取り組んでいる。対象となる授業には、4～5名、時にはそれ以上の人数の留学生が受講している。

では、このような試みは、担当する日本語教育専攻の学生と彼らを指導する国際学類、そして金沢大学に所属する留学生の日本語学習を支援する留学生センターにとってどのような意義があるのであろうか。

この学内インターンシップに参加する日本語教育専攻の学生は、ほとんどが日本語教師を実際に目指す学生である。これまでこの実地研修に参加した学生は大学院に進学したり、国内・国外の日本語学校に常勤講師として就職し活躍している。日本語教育機関への就職には、現場での経験を求められることが多く、教育実習だけでなく様々な場での実践経験を積んでおく必要があるが、ここでの経験はまさにそのようなものとなりうる貴重なものであると言えよう。また、実際に授業を担当するだけでなく、その前後の専任教員による指導、また共に研修に従事している学生との討議などもあり、多くのことを学習できる場でもある。担当した学生への聞き取り調査では、「医学部補講」での経験が非常に役に立ったという意見が多く出ている。また、彼らの教えている医学部留学生は、彼らが角間キャンパスで接することの多い文系留学生と非常に異なる背景を持った学生であるため、この研修で日本人学生は、多様な学習者、多様な学習ニーズに触れることが出来る。これも彼らの経験の幅を広げることになるだろう。彼らを指導する国際学類の教員にとっても、この試みは、一定期間継続的に授業担当を通して指導しアドバイスできる貴重な機会となっている。金沢のような地方都市では、学生に実地訓練の場を見つけるのは難しいので、この医学部での研修は彼らにとって不可欠なものになっていると言える。

さて、全学の留学生に対する日本語教育を提供している留学生センターにとってもこの試みは非常に有益なものである。まず、現状では専任教員・非常勤講師だけで医学部補講に多くのレベルの授業を提供することは出来ない¹²⁾。しかし現実には医学部には様々なレベルの学習者が来る。そのため、これまでは自分のレベルに合う授業がなく仕方なく受講を諦める学生もいたわけだが、日本人学生による授業を取り入れることで、レベル数を増やすことが出来、このようなミスマッチを減らすのに役立っている。留学生にとっては、自分に合ったレベルの授業を受ける可能性が広がったわけで、うれしいことであろう。また、日本人学生の担当する授業は、留学生が実際に授業にきた後にレベルのチェックやニーズの聞き取りを行うため、通常の（教育内容の

固定した) クラスとは異なった、学習者のためのオーダーメイドの教育となっていることも利点の一つであろう。

また、歳の近い日本人学生の指導は、留学生にとっても新鮮なものようである。留学生に感想などを聞いたところ、親しみやすい、質問しやすい、若い日本人の考えを直接聞くことが出来るというような意見があり、好評であった。

このように、現在この学生インターンシップは、担当する日本人学生、国際学類教員、留学生センター教員の三者いずれにとっても意義があり、必要不可欠な存在となっている。日本語教師養成プログラム担当の部局と留学生への日本語教育プログラム担当の部局の業務は互いに補完し合える部分が多く、協力体制を築くことが出来ればお互いに資することが多いと思われるが、現実には様々な理由によってなかなか協力体制が取れないのが現実のようである。しかし、金沢大学の医学部補講でのこの試みは、そのような協力関係の一つの例と言えるのではないだろうか。

(文責：峯)

Ⅶ おわりに

以上、金沢大学におけるグローバル人材育成を日本語教師養成を軸に見てきた。もちろん、金沢大学ではグローバル人材育成のために様々な分野で様々な試みが行われており、日本語教師養成はその一部に過ぎない。しかし、ここまで述べてきたように、日本語教師養成のために、国際学類日本・日本語教育コースと留学生センターや大学内での関係部署、そして、大学外部の機関との連携などが広く行われ、推進されてきていることがわかる。このコースから、日本語教師として国内外で活躍する学生だけでなく、日本語教師として学んだことを活かし、グローバル企業での人材育成に関わったり、多文化共生社会を目指す行政機関で施策の提案や実施を行うなど、多様な方面での活躍が期待できると思われる。

本稿では触れなかったが、大学院人間社会環境研究科内に、国際学専攻日本語教育・日本文化コースがあり、在籍している大学院生は、留学生の TA や医学部補講での活動で活躍している。大学院生の中には留学生も多く、中には母国での日本語教師を目指す学生もいるが、現在はまだ、このような留学生に十分な実習機会を提供できていないのが現状である。グローバル人材養成には、日本人学生だけでなく、当然、留学生も含まれるであろう。今後も時代のニーズに適合したカリキュラムや活動を提供していきたいと考えている。

(文責：深澤)

【注】

- 1 深澤のぞみ（国際学類）、太田亨・峯正志（国際機構留学生センター）
- 2 金沢大学におけるグローバル人材育成の理念と日本語教師養成の関係については、深澤他（2013）の「グローバル人材としての日本語教師養成」『金沢大学留学生センター紀要』第16号にまとめて述べてある。
- 3 国際学類日本・日本語教育コース公式ホームページによる。
<http://sis.w3.kanazawa-u.ac.jp/course/japanese.html>
- 4 平成12年に出された「日本語教師の養成に関する調査研究協力者会議」（文化庁）による「日本語教育のための教員養成について」では、主専攻・副専攻の区分等は設けないとされているが、日本語教育機関の審査認定する日本語教育振興協会における「日本語教育機関の運営に関する基準」では、日本語教師の資格として大学日本語教育に関する主専攻（日本語教育科目45単位以上）という表現を用いている。なお、本コースでは、「日本語教育副専攻相当資格」についても、所定の単位を取得すれば付与されることになっている。
- 5 実習に協力してくれた留学生には国際学類長から「ボランティア証明書」が授与される。
- 6 評価の内訳については次項で触れる。
- 7 教育実習のコース運営に当たっては、この授業の受講生が中心に行うが、コース内容や授業を決めるための指導助言、最終チェックは担当教員の深澤が行う。また日本語教育を専攻する大学院生がTAを勤め、共に議論し、必要に応じて支援や助言を行った。
- 8 金沢市内では、石川県国際交流協会が提供する日本語教室（有料／無料）や、金沢市国際交流財団が提供するボランティアによる日本語教室などがあり、そのほか、大学の留学生別科や日本語学校などでも、日本語の授業を受講できるところがある。
- 9 留学生配偶者の受講生募集にあたっては、学内などにポスターを掲示する以外に、留学生センターの日本語授業のオリエンテーションや、国際機構支援室国際交流係の窓口の協力などもいただいた。また、実際に参加した日本語学習者は、留学生の配偶者だけではなく、留学生の兄弟なども含まれている。
- 10 2011年については、日本語教育実習Bの後、さらに日本語の勉強を続けたいという学習者が多く、日本語教育専攻の大学院生の調査も兼ねて、留学生配偶者のための夏コースを実施した。このコースも、最後まで熱心に通ってきた留学生配偶者が数人いた。
- 11 日本語教育能力試験にも合格している学生がほとんどである。
- 12 医学部補講開始時は1レベルしかなかった。その後2レベルになり、現在は「入門、初級、中級」の3レベルで開講している。「入門」と「初級」を終えると、角間キャンパスでの初級前半が終了することになる。「中級」は初級後半から初中級レベルをカバーする授業である。

【参考文献】

深澤のぞみ・志村恵・加藤和夫（2013）「グローバル人材としての日本語教師養成」『金沢大学留学生センター紀要』第16号，pp.1-13

The Training Course of Japanese Language Teacher as Global Human Resource Development -Its Practice and Outcomes-

Nozomi Fukasawa, Akira Ota and Masashi Mine

Abstract

Globalization comes to be thought as important with social various aspects. The Japanese Studies Course, the School of International Studies trains Japanese language teachers in cooperation with International Student Center. This paper reports practice and outcomes of the training course of Japanese language teacher.